

気比の松原100年構想

—クロマツとアカマツのおりなす 白砂青松の松原の再生—

福井県敦賀市にある「気比の松原」(写真1)は、日本三大松原の一つであり、名勝、若狭湾国定公園、保健保安林、レクリエーションの森などに指定されている東西約1km、南北約400mの国有林です。気比の松原は文化的価値、観光資源、森林散策の場として重要であるばかりでなく、潮害防備保安林として住民の生活環境を守る役割を持っており、海岸のマツ林としては珍しく、アカマツが多く生育しているという特徴を持っています。今回は「気比の松原」が抱える問題とその再生へ向けた取組について紹介します。



写真1

気比の松原

気比の松原は、古くは気比神宮の庭園として、近世においては小浜藩有林として禁伐等の森林保護施策が行われ維持されてきました。明治2年の版籍奉還により国有林になってからは、潮害防備保安林の指定(明治35年)、松原公園の開設(明治41年)、名勝の指定(昭和3年)が行われるとともに、気比松原国有林施業計画の樹立(昭和8年)などにより、保全と活用に向けた取組がなされてきました(写真2、3)。

一方で、太平洋戦争中には造船用材としてマツが伐採されたり、航空機用燃料として松根油の採取も行われました。また戦前戦後を通じて学校用地や住宅地等として活用され、松原の面積は明治期の約76haから約32haに減少し、現在に至っています。

■「気比の松原」の歴史

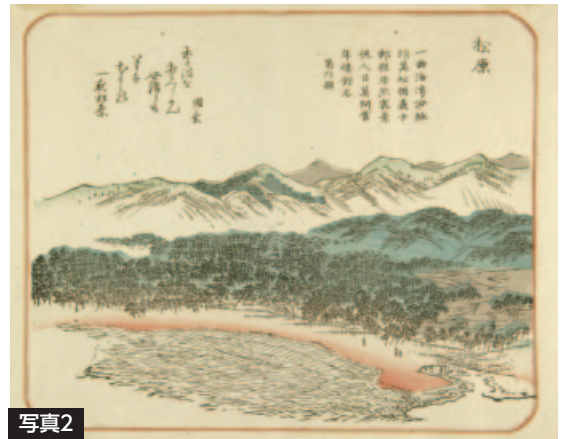


写真2

明治初期の松原
(出典：「敦賀十勝」(益田伸芸・内海元紀、明治7年))

■松原の危機と再生への取組

森林としての松原をみた場合、昭和30年代までは入林者の増加や燃料としての松葉の利用など、過剰利用による森林の劣化が懸念されましたが、生活様式の変化により、松葉かきも行われなくなつてからは次第に広葉樹の侵入が目立つようになりました。マツは陽樹であるため、広葉樹の侵入が進んで林内の光環境が悪化すると、稚樹が成長できなくなつてしまいます。

昭和50年代後半～60年代初めにかけて地元敦賀市の要望を受けて広葉樹の伐採を実施し、その後、マツの植栽や松くい虫防除事業などを行ってきました。特に松くい虫防除事業については、薬剤の地上散布や樹幹注入、枯死木の



写真3

昭和初期の松原
(出典：「ふるさと敦賀の回想」(敦賀市、昭和62年))



図2 広葉樹が侵入する林分



図1 樹林密度が高く樹冠が小さい林分

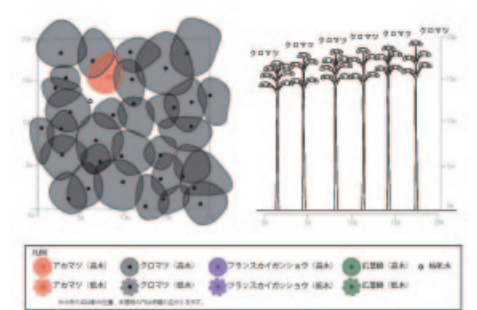
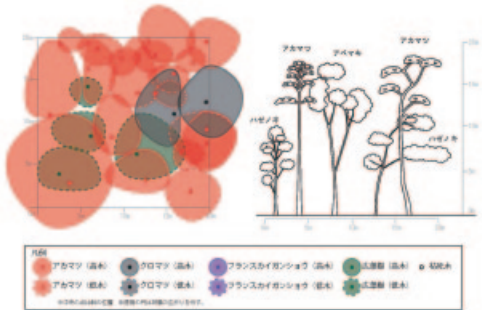


写真5

気比の松原100年構想シンポジウムの様子



写真4

市民による落ち葉かき

伐倒駆除により、継続的に防除を行っています。しかし、近年再び広葉樹の増加が見られるとともに、年間2000〜3000本のマツが松くい虫被害等により枯死している現状にあります。

このため、福井森林管理署では、平成24年度に研究機関、行政機関、地元団体等からなる検討委員会を設置し、地元市民の生活に密着した保安林であ

り、かつ重要な景観である松原を残していくため、将来を見据えた基本方針を樹立することとしました。委員会で各種調査、検討を行い、松原が現在抱える問題点として、松くい虫による枯損、広葉樹の著しい侵入、高い樹林密度、風雪害による倒伏・幹折れ、根の成長異常等を明らかにし(図1、2)、また市民の要望として「松原を松原と

して将来に残してほしい。」という熱意に接することもできました。

これを踏まえた対策の3本柱として、①松くい虫対策の継続・徹底、②広葉樹の除去、③マツの密度調整(現在3000〜10000本/haある密度を将来的に2000〜4000本/haにする)を実施するとともに、植生遷移の進行を押しとどめマツの生育に適した環境に戻すべく、一般市民の方にも協力していただきながら、落ち葉かきなどの管理(写真4)に取り組んでいくこととしました。

福井森林管理署では、これら一連の取組を「気比の松原100年構想」と名付け、本年2月23日に敦賀市で開催したシンポジウム開催(写真5)をはじめとして、マスコミへの積極的な情報提供など広く周知を図っています。

「気比の松原100年構想」では、「クロマツとアカマツのありなす」「白砂青松の松原」の再生を整備管理基本方針として掲げ、具体的には、「海辺のクロマツゾーン」「気比のアカマツゾーン」「内陸のアカマツゾーン」に区分し(図3)、ゾーンごとに樹林密度の調整や広葉樹除去の強度を決めました。また全域にかかるとして、松くい虫防除、腐植層形成の抑制(落ち葉かき、下草刈り)、天然生稚樹の育成などを

「気比の松原100年構想」

気比の松原 100年構想

クロマツとアカマツがありなす「白砂青松の松原」の再生



図3

気比の松原ゾーニング図

実施することとしています。地元においても、市民自らが主体的に松原の保全管理に取り組んでいこうという気運が高まり、7月には協議会も結成されます。

今後も「国民の森林」として、地域に親しまれ、地域を巻き込みながら、地域に貢献できる取組を進めて参ります。